

中等國文法教科書 上卷

10

221

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



山田孝雄
文學士内海弘藏
共著

中等國文法教科書

東京寶文館藏版

緒言

一、本書は中等教科の學校に於ける、國語科の文法教科書にあて
むが爲に著したるものなり。
一、本書は卷上に於いて、文法の概念と品詞の一般とを解説し、卷
下に於いてその補充と、文章の結構の一般とを解説したり。
一、本書は根本的にして、しかも實際的なる文法を、學生にすゝめ
むことを以て、その目的とせり。しかしてこれが爲に、特に理義
の明晰と、趣味の潤澤とに、用意をつくし、また演習と引例とを
重視したり。

大正六年十月

著者

中等國文法教科書 卷上



目次

第一篇	總說	三
第一章	言語	三
第二章	文字	三
第三章	文章	三
第四章	文章の二體	五
第二篇	品詞	その一
第一章	單語の類別	九

大正
7.2.7
内交

目次

第二章	名詞	一〇	
第三章	代名詞	一二	
第四章	動詞	一三	
第五章	形容詞	一六	
第六章	助動詞	一九	
第七章	副詞	二一	
第八章	接續詞	二四	
第九章	助詞	二六	
第十章	感動詞	二八	
第三篇	品詞	その二	三一
第一章	名詞の種類	三一	

第二章	代名詞の種類	三五	
第三章	動詞の活用	その一	四一
第四章	動詞の活用	その二	五一
第五章	動詞活用形の類別	五七	
第六章	動詞の性	六三	
第七章	動詞の綴字	六六	
第八章	形容詞の活用	七一	
第九章	形容詞活用の類別	七四	
第十章	形容詞の綴字	七七	
第十一章	助動詞の種類	その一	七九
第十二章	助動詞の種類	その二	八三
第十三章	助動詞の活用	九〇	

第十四章 助動詞活用形の類別……………九四

目次終

中等國文法教科書 卷上

第一篇 總說

第一章 言語



言語

物にふれ、事にあへば、われらの心は、おのづからに感動す。感じてさて思ふことあれば、われらはそれを聲にあらはす。その聲に一定の意味あるもの、これを言語といふ。國土國民の異なるにしたがひて、その言語もまた相異れり。かくて世界の國々には、みなその特殊の言語あり。それをその

國語

國の國語と稱す。

われら日本國民の用ゐる言語は、すなはちわが日本帝國の國語なり。

▲言語——國語

第二章 文字

文字

言語をかきうつす符號を文字といふ。文字もまた、世界の國によりて、その形を異にせり。

われらの用ゐる文字に二種あり。一を假字といひ、一を漢字といふ。

假字と漢字と、これをわが國の國字となす。

假字
漢字

國字

▲文字——假字、漢字。

練習

- 一、假字の種類及びその數をいへ。
- 二、五十音圖を平假字にてしたゝめよ。
- 三、五十音圖の行及び段を説明せよ。
- 四、左の本字にその音と訓とをつけよ。
春 秋 人 國 父母 山川 草木

第三章 文章

言語といふに、おのづから二種の別あり。

花 鳥 山 月 英雄 豊臣秀吉 かれ そこ 咲
く 鳴く 勉強す 高し 淺し 明なり ず なり

單語

候ふ まだ はや ぼつぼつ は どの
等は、いづれも一つ一つのまゝなる言語なり。かく一つ一つのまゝにして、そのもちまへだけの意味を有するものを單語といふ。單語は略して、語とも稱せらる。

また、

花咲く。 鳥鳴く。 山高し。 月明なり。

かれは優良の生徒なり。 豊臣秀吉は英雄なり。

春はまだ浅く候へど、土手の櫻ははやぼつぼつ咲きそめ候ふ。

等は、いづれも二つ以上の單語を結び合せたる言語なり。

かく二つ以上の言語を結び合せ、更に一つのまとまれる

文章

意味をあらはしたるものを**文章**といふ。文章は單に**文**とも稱せらる。

文法

かく單語と單語とを結び合せて、一つのまとまれる意味をあらはすには、その國語の性質によりて、おのづからに定れる規則によらざるべからず。その規則を**文法**といふ。わが國文法は、すなはちわが國語の、そのおのづからなる性質に従つて定められたる規則なり。

▲單語——文章——國文法

第四章 文章の二體

われらが現在用ゐる國語の文章には、二様の體形あり。たと

へば、

友だちを尋ねる。

朝はやく起きる。

あの馬はよほどはやい。

○

友人を尋ぬ。

朝はやく起く。

かの馬は頗るはやし。

等の如く、同一の意味をあらはす文章に、おのづから二様の體形あり。

この二様の體形のうち、前者の如く、おもに談話に用ゐるも

口語體の文章
文語體の文章
言文一致體の文章

のを口語體の文章といひ、後者の如く、主として文章に用ゐるものを、文語體の文章といふ。
口語體の文章は、別にまた言文一致體の文章とも稱せらる。しかして普通に文章と稱せらるゝは、すなはち文語體の文章のことなり。

◎ 文章 (口語體の文章(言文一致體の文章) 文語體の文章) ◎

練習

一、左に擧げたる口語體の文章を、文語體の文章にあらためよ。

- (一) 花が咲いた。
- (二) あしたは日曜だ。
- (三) むかうの山までは、いく里あるだらう。

- (四) 前の山も、うしろの山も、みんな霞につままれてしまった。
 二、左に挙げたる文語體の文章を、口語體の文章にあらためよ。
 (一) 弟は最もよく母に似たり。
 (二) 野を行き、岡にのぼり、橋二つ渡れど、日はまだ高し。

第二篇 品詞 その一

第一章 單語の類別

單語はその性質によつて左の九種に類別せらる。

名詞	代名詞	動詞	形容詞	助動詞
副詞	接續詞	助詞	感動詞	

これらの單語の一種、たとへば名詞、動詞の如きものを稱して品詞といふ。すなはちわが國語には、九種の品詞あり。これを總稱して九品詞といふ。

▲品詞——名詞、代名詞、動詞、形容詞、助動詞、副詞、接續詞、助詞、感動詞。

品詞

第二章 名詞

人 犬 花 山 天 地 光 霞 思 深 さ 樂 し
さ 勉強 散歩 ボート 富士山 豊臣秀吉

等は、いづれも事物の名稱なり。

すべて事物の名稱として用ゐらるゝ語を名詞といふ。

- 一 二 三 百 千 萬 第十番 四百個 半ダ
- ス

等の如く、事物の數、事物の順序をあらはすに用ゐる語も、また名詞に屬す。

練習

左の文につきて、名詞を指摘せよ。

名詞

- (一) 日本は島國なり。
- (二) 島より島に、虹わたれり。
- (三) 口笛を吹いて犬を呼ぶのは、弟だらう。
- (四) 上に萬世一系の天皇をいたゞく。
- (五) 學校から歸つて、部屋へはひると、机の上の水入に、一輪の薔薇が挿されてある。
- (六) 抑も日本海を通過せむとせし敵艦隊は、約三十八隻にして、わが撃滅もしくは捕獲にもれたりと認むるものは、巡洋艦、驅逐艦、及び特務艦のおの數隻に過ぎず。
- (七) 命もいらす、名もいらす、官位も金もいらぬ人は、始末に困るものなり。この始末にこまる人ならでは、艱難を共にして、國家の大業を成し遂ぐることは望み得ざるなり。

第三章 代名詞

われ 小生 汝 かれ これ そこ かしこ いづ
こ いづれ

等は、いづれも事物の名稱に代へて用ゐらるゝ語なり。
すべて事物の名稱に代へて用ゐる語を代名詞といふ。

代名詞

練習

- 一、左の文につきて、代名詞を指摘せよ。
- (一) 　こゝに君と二人すまはむ。
- (二) 　この林檎の数はいくつならむ。
- (三) 　こゝに一兵士の、少許の水を見出したるがあり。かれはこの貴き水を、われ一人飲むに忍びず、胃の鉢に盛り捧げて、恭しくかなたなる大王の馬前に進めり。

體言

名詞と代名詞と、これを合せ稱して體言といふ。

第四章 動詞

花咲く。 書を讀む。
小川の水流る。 燈臺に火が見える。

- (三) 青草の茂りたる野を、横さまに行きて、小さき岡に登る。
- (四) 春盡きて夏來る。これを人にたとふれば、少年期を過ぎて、まさに青年期に入りたるが如し。

第五章 形容詞

淺き流。 樂しき遊。

月清し。 歌おもしろし。

右に擧げたる文章の淺き、樂しき、清し、おもしろしは、いづれも事物の性質、狀況を形容したり。すべて事物の性質、形狀を形容するに用ゐる語を形容詞といふ。

形容詞

新なる思。 奇なる人物。

別類形容詞

形容詞の語の變化

天氣清朗なり。 流水滔々たり。

右に擧げたる文章の新なる、奇なる、清朗なり、滔々たりも、また事物の性質、狀況を形容したり。故にこれらも形容詞に屬す。この種の形容詞を、しばらく別類形容詞と名づく。

形容詞にも語形の變化あり。たとへば、淺しといふ形容詞は、

淺く流るゝ水。 水淺し。

淺き流。 水淺けれど流急なり。

の如く、淺く、淺し、淺き、淺けれと變化し、

樂しといふ形容詞は、

樂しく遊ぶ。 遊樂し。

樂しき遊。 遊樂しければ歸るを忘る。

の如く、樂しく、樂し、樂しき、樂しけれと變化す。すべての形容詞は、みなそれぞれに語形の變化するものなり。

練習

左に擧げたる文につきて、形容詞を指摘せよ。

- (一) 水清く月明なり。
- (二) たのし、うれし、けふは父の誕生日。
- (三) 山深くして、伐木の聲丁々たり。
- (四) 義は泰山より重く、死は鴻毛より輕し。
- (五) 苦しきにも堪へ、樂しきにも堪ふるは、丈夫といふべし。

用言

動詞と形容詞とを合せ稱して用言といふ。

▲體言	名詞	用言	動詞
代名詞		形容詞	

第六章 助動詞

書を讀まむ。 書を讀まず。 書を讀ましむ。

書を讀みたり。 書を讀むべし。 書を讀むなり。

右に擧げたる文の、むず、しむ、たり、べし、なりは、いづれも動詞につきて、その作用を助けたり。

すべて動詞につきて、その作用を助くるに用ゐる語を助動詞といふ。

助動詞はまた、

讀みたるべし。 讀ましめらる。

の如く、他の助動詞の下にもつき、時としては、

助動詞の語
形の變化

われは孤兒なり。父は父たり、子は子たり。
 の如く、名詞の下にもつき、また、
 かくの如し。眠るが如し。
 の如く、の、がの下にもつくものあり。
 書を読み給ふ。ありがたく存じ候ふ。
 の如く用ゐる時の給ふ、候ふの類も、またこの助動詞に屬す。
 助動詞もその語形變化す。たとへば左の如し。
 花咲きたらば、はやく知らせよ。
 汀なぎさの藤、美しく咲きたり。
 垣根のもとに咲きたるは、何の花ぞ。
 花は咲きたれど、香はまだ淺し。

練習

- 左に擧げたる文につきて、助動詞を指摘せよ。
- (一) 日はくれぬ、月も出でたり。
 - (二) 彼は忠義なる人なりき。
 - (三) 百聞は一見にしかず。
 - (四) たゞ専念につとめ勵むべし。
 - (五) 旗の青きは、浪のなごたるを知らするなり。
 - (六) いざ行きて、ボート漕がむ。
 - (七) まことに御本懐の御事と、存じ上げ候ふ。

第七章 副詞

空にはかに曇る。學未だ成らず。
 いよいよ入りて、いよいよ山の深きをおぼゆ。

はじめじめと降る五月雨のいぶせさ。
至急お出下されたく候ふ。

右に挙げたる文のにはかに、未だ、いよいよ、はじめじめと、至急、はいづれも、曇る、成らず、入りて、深き、降る、お出で等の、それぞれの動詞、形容詞に副ひて、その意義(動作、形状)を限定したり。すべてかくの如く、動詞もしくは形容詞の意義を限定するため、副へて用ゐる語を副詞といふ。

副詞

副詞はまた、

最も早く来る。

やゝしばらく考ふ。

の如く、その意義を限定する爲に、他の副詞に副ふことあり。但しこれらは、二つの副詞の連りて、更に一つの副詞となれ

るものと見なすことを得べし。

副詞には、文語と口語とによりて、その形の異なるものあり。左にその二三の例を挙げ示さむ。

文語	口語	文語	口語
なほ	やはり	なにとぞ	どうぞ
甚だ	たいそう	方に	いまちようど
必ず	きつと	さながら	ちようど
頗る	よほど	やうやう	だんだん
いかに	どんなに	辛うじて	やつと
いかでか	どうして	恰も	ちようど
むしろ	いつそ		

練習

左の文につきて、副詞を指摘せよ。

- (一) 日がだんだん長くなる。
- (二) 山雲を得て、ますますその美を加へ、いよいよその大を添ふ。
- (三) 天まさに曙ならむとして、白雲徐に山脚に收り、連峯悉く天を摩す。
- (四) 泉の水は常に耳邊に鳴り、縦横せる枝は、よりより頭上に微搖す。

第八章 接續詞

山また山。 部屋暗うなりぬ。さらば燈をつけむ。

池のあやめの咲きそめ候ふ。すなはち一もと折りて、御目にかけて候ふ。

接續詞

右に擧げたる文のまた、さらば、すなはちは、それぞれ語、または文を結びついたり。

すべて、かくの如く、語、または文を結びつくるに用ゐる語を

接續詞といふ。

參上いたすべきの處、 あすは日曜に候ふ故、

學淺く才拙しといへども、

右の文の處、故、いへども等の如きも、同じく接續詞なり。

練習

左の文につきて、接續詞を指摘せよ。

- (一) 國語及び漢文。
- (二) 庭はたゞ三坪。誰かいふ、狭くして、且つ陋なりと。
- (三) 森また森、いくらいつてもはてしがない。それに雨は降る、日はく

れる、人里は遠い。

(四) 蓋しわが日本の事物、歐米諸國に及ばざるもの多し。しかして新聞紙は、すなはちその及ばざるもの、最たり。

第九章 助詞

人の命。誰が靴音ぞ。

舟は湖面をすべりつゝ行く。

われは吉田君と、連日温習會を催せり。君もあすより通ひて來ずや。

右に挙げたる文のの、が、ぞ、は、を、つゝ、とも、より、て、やは、いづれもそれぞれの語につきて、その意を導き、その意を添へ、或はその語と他の語との關係を示したり。

助詞

てにをは

すべてかくの如く、いろいろの語につきて、その意を導き、その意を添へ、或はその語と他の語との關係を示すに用ゐる語を助詞といふ。助詞はその數頗る多し。大抵一音より成り、多きも三音以上に出づるものあらず。

助詞はまた、てにをはとも稱せらる。

練習

左に挙げたる文につきて、助詞を指摘せよ。

- (一) 花のうつくしきが、むらがり咲けり。
- (二) 瓦を抱いて玉を思ふ。
- (三) 朝に新聞を賣り、夕に文章を學ぶ。
- (四) 義に勇み節に死するは、丈夫の本懐。

- (五) 父は木こりにとて、この暑き日を山に入りぬ。
- (六) 千鳥の聲、浪より離れて、さやかに月の渚に落ちぬ。
- (七) 夜もはや更けぬ。みゝすの歌も近く聞えて。
- (八) 思ひきや、けふ兄君の歸らむとは。
- (九) 松は立てり、巖と巖との迫れるはざまに。
- (一〇) 寛の水は滴りつゝ、いつか月の雫となりぬ。

第十章 感動詞

あゝまた何をかいほむ。
 あはれいたましき友の身の上。
 いざ行きてボト漕がむ。
 いな君、われはしかおもはず。

さてさて不憫なことをした。

すはや喇叭の聲聞ゆるぞ。

それよ思ひ出したり。

やあなど敵に、うしろを見するぞ。

感動詞

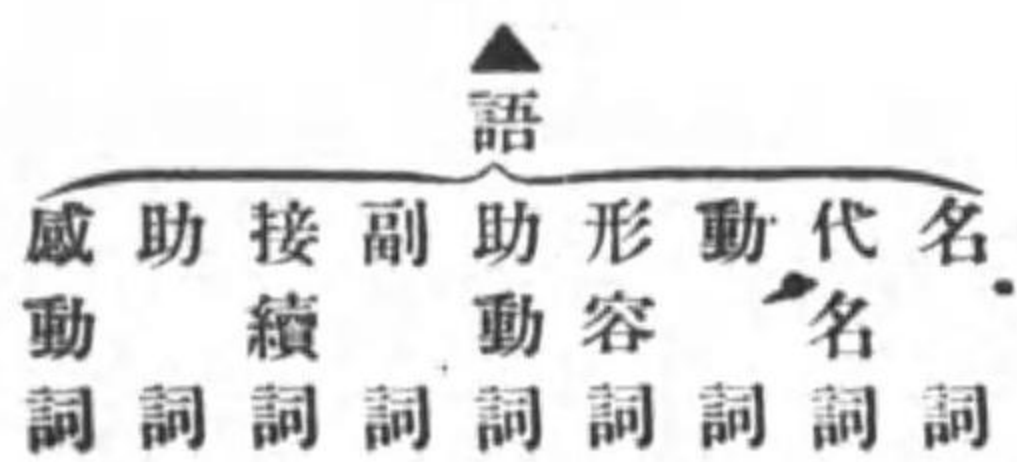
右に挙げたる文のあゝ、あはれ、いざ、いな、さてさて、すはや、それよ、やあは、いづれもそれぞれに感動の趣をあらはしたり。すべてかくの如く、感動の趣をあらはすに用ゐる語を感動詞といふ。

練習

左に挙げたる文につきて、感動詞を指摘せよ。

- (一) あ射たり射たり。
- (二) あなうれし、夢に竹馬の友にあひつ。

- (三) いでまっさきに^的を射貫かむ。
- (四) いか^に時致陣屋陣屋は雨に更けて、燈火暗く、人氣絶えしぞ。
- (五) おゝ君か、絶えて久しく逢はざりしよ
- (六) さ承り候ひぬ。
- (七) そらまた浪が寄せて來たぞ。
- (八) はて、あれはどこへしまつたかしらぬ。



第三篇 品詞 その二

第一章 名詞の種類

名詞は、その性質上、おのづから二種に別たる。一を**普通名詞**といひ、一を**固有名詞**といふ。しかして普通名詞の中に、特に**表數名詞**と稱せらるゝものあり。

普通名詞

一、普通名詞

朝とく起きて渚に出づれば、貝はうち寄せられて、沙にあり。
 風鈴の音もせず、庭の木の葉も動かず、大空の雲のみあわたゞしげに走る。

兵役はわが國民の最も大なる義務の一なり。

右に擧げたる文の朝、渚、貝、沙、風鈴、音庭、木、葉、大空、雲、兵役、國民、義務等は、いづれもその同種類の事物一般に通ずる名稱なり。

かくの如く、あまねく同種類の事物に通じ用ゐる名詞を、**普通名詞**と稱す。

固有名詞

二、固有名詞

鎌倉に遊びて、源頼朝の墓を弔ふ。

ボアソナード氏の佛蘭西に歸るを送る。

右に擧げたる文の鎌倉、源頼朝、ボアソナード、佛蘭西等は、いづれもその一事物にのみ限られたる名稱なり。

表數名詞

かくの如く、特に一事物に限り用ゐる名詞を**固有名詞**と稱す。すなはち人名、地名、書名等、一事一物の固有せる名稱は、すべて固有名詞なり。

三、表數名詞

花二つ三つ咲きたり。

第一の問題よりも、第二の方がむづかしい。

右に擧げたる文の二つ、三つ、第一、第二は、いづれも事物の數量、または順序をあらはせる名稱なり。

かくの如く、特に事物の數量、または順序の名をあらはすに用ゐる名詞を**表數名詞**といふ。

表數名詞は他の普通名詞につきて、三人、十年、七歳、二里、一册、

三本の如くに熟用せらるゝこと多し。

▲名詞 普通名詞——表數名詞
固有名詞

左の文につきて、名詞を指摘し、その種類をいへ。

- (一) 宿とする處は材木座光明寺の前居ながらにして鎌倉の海を
目に望むべく、向には靈山が崎につゞきて江の島の浮べるあり少
し左に離れて雲間に富士の聳ゆるあり。
- (二) 木曾義仲五十騎ばかりになりて、むらがる敵を破つて行くほど
に、土肥次郎實平二千餘騎にて支へたり。そこをも破つて行くほど
にあすこにては四五百騎、こゝにては二三百騎、百四五十騎、百騎は
かりが中を、かけわりかけわりゆくほどに、主従五騎にぞなりにけ
る。
- (三) ビスマルクは、獨逸の片田舎なる貴族の家に生れたり。六歳に達
せし時、母は彼を國都ベルリンに送りて、某博士の家塾に入學せし

めたり。その家塾は全くスマルタ流の教育をむねとせるものにて、
過激なるまでに體育を奨励したり。

第二章 代名詞の種類

代名詞に人代名詞、指示代名詞の二種あり。

一、人代名詞

君はこれを難しとなすか。よしわれ断じてこれを成
すべし。

今なき親の家をつくべきもの、孫にしては汝一人の
み、子にしては余一人のみ。

右に擧げたる文の君、われ、汝、余は、いづれも人の名に代へて

人代名詞

用ゐたり。故にこれらの代名詞を人代名詞と稱す。

人代名詞はまた、**自稱**、**對稱**、**他稱**、**不定稱**の四種に別たる。

人代名詞の
四種
自稱

(一) **自稱** 余、われ、わたくし、小生、僕、拙者等は、自己の名に代へて用ゐる。これらを自稱といふ。

對稱

(二) **對稱** 汝、貴君、あなた、そなた、お前等は、對者の名に代へて用ゐる。これらを對稱といふ。

他稱

(三) **他稱** 彼、あいつ、あのかた等は、われと對者との間に話し出す人、またはわれと隔りたる人の名に代へて用ゐる。これらを他稱といふ。

不定稱

(四) **不定稱** 誰、だれ、なにがし、どなた等は、それと定らぬ人、またはその名のわからぬ人の名に代へて用ゐる。これ

らを不定稱といふ。

左に人代名詞の普通なるものを表示すべし。

人	稱			不定稱
	自	對	他	
代	わ、われ、余、拙者、小生、	な、汝、そなた、君、あ	か、彼、あ、あれ、あ	た、誰、だれ、どな
名	生、僕、わたくし、わた	な、た、貴君、貴下、閣	い、つ、か、やつ、き	た、ど、いつ、なに
詞	し、わし、おのれ、自分、	下、お前、貴様、御身、	やつ、あのかた、	がし、どのかた、

指示代名詞

二、指示代名詞

これは見なれぬ草花なり。

そこに居るのは誰か。

あなたに高きは故里の山。

右に擧げたる文のこれ、そこ、あなたは、それぞれ事物、地位、方

向を指し示したり。故にこれらの代名詞を指示代名詞といふ。

指示代名詞の四種

指示代名詞は、その指し示す位置の差異によりて、更にまた近稱、中稱、遠稱、不定稱の四種に別たる。

近稱

(一) 近稱 これ、こゝ、こなた等は、自己に近き事物、地位、方向を指し示すに用ゐる。これらを近稱といふ。

中稱

(二) 中稱 それ、そこ、そなた等は、自己の位置より少しく離れたる事物、地位、方向等を指し示すに用ゐる。これを中稱といふ。

遠稱

(三) 遠稱 かれ、かしこ、かなた等は、自己の位置より遠き事物、地位、方向等をさし示すに用ゐる。これを遠稱といふ。

不定稱

(四) 不定稱 いづれ、いづこ、いづか等は、それと定らぬ事物、地位、方向等を指し示すに用ゐる。これらを不定稱といふ。

左に、指示代名詞の普通なるものを表示すべし。

指示事物	指示地位	代名詞	方向
こ、これ	こ、こゝ	こち、こなた	
そ、それ	そ、そこ	そち、そなた	
あ、あれ	か、かしこ	あち、あなた	かなた
ど、どれ	なに、いづれ	いづち、いづか	



練習

左の文につきて、その代名詞の種類をいへ。

- (一) あちこち歩いてゐるうちに、目がくれてしまった。いづこともなく、さびしい野寺の鐘が聞える。
- (二) 攝津の海岸、西に盡くる所を須磨といふ。相傳ふ在原行平卿、勅勘を蒙りて、久しくこの土に住せりと。その後、壽永の亂に源平二氏、大いにこゝに戦へり。

語尾
語幹
活用

第三章 動詞の活用 その一

われらはさきに、動詞に語形の變化あることを學びたり。動詞の語形は、おのづから變化する部分と、變化せざる部分とにわかたる。その變化する部分を語尾といひ、その變化せざる部分を語幹といふ。しかしてその變化を動詞の活用と稱す。

動詞の活用は、その語によりて同じからず。故にその異なる點に基きて、これを分類す。四段活用、上一段活用、下一段活用、上

四段活用

二段活用、下二段活用、變格活用、すなはちこれなり。

一、四段活用

行く、打つ、知る等の動詞は、いづれも、

行	か	き	く	け
打	た	ち	つ	て
知	ら	り	る	れ

の如く五十音のア、イ、ウ、エの四段に活用す。かく四段に活用するすべての動詞を、四段活用といふ。

動詞の四段活用は、五十音圖中、左の六行に限らる。

書	か	き	く	け	(カ行)
推	さ	し	す	せ	(サ行)

上二段活用

これらの活用は、その活用の行によりて、カ行活用、サ行活用、タ行活用などいふ。活用は略して、活とのみ稱せらる。故にここに活用する動詞を稱するには、カ行四段活、サ行四段活、タ行四段活などいふ。

四段活の動詞は、その數最も多し。

四段活の動詞は、口語にてもその活用、全く相同じ。

二、上一段活用

著る、似る、見る等の動詞は、いづれも、

(著) き き…る き…れ

(似) に に…る に…れ

(見) み み…る み…れ

の如く、五十音圖中、たゞイの一段にのみ活用し、れ_レの二音
それにそはれり。かくイの一段にのみ活用する動詞を、上
一段活用といふ。

動詞の上一段活用は、左の六行に限らる。

(著) き き…る き…れ (カ行)

(似) に に…る に…れ (ナ行)

(干) ひ ひ…る ひ…れ (ハ行)

(見) み み…る み…れ (マ行)

(射) い い…る い…れ (ヤ行)

(居) ろ ろ…る ろ…れ (ワ行)

この活用の動詞は、その數甚だ少し。普通に用ゐらるゝもの
は、以上の外、僅に五六語あるのみ。

上一段活の動詞は、口語にてもその活用、全く相同じ。

三、下一段活用

蹴るといふ動詞は、

(蹴) け け…る け…れ (カ行)

の如く、五十音圖中、たゞエの一段にのみ活用し、る_ルの二音
それにそはれり。これを下一段活用といふ。

下一段活用

上二段活用

動詞の下一段活用は、この一行、この一語のみなり。この語は、口語にてもその活用、全く相同じ。

四、上二段活用

起く、落つ、酬ゆ等の動詞は、いづれも、

起	き	く	く……る	く……れ
落	ち	つ	つ……る	つ……れ
酬	い	ゆ	ゆ……る	ゆ……れ

の如く、五十音圖中、イ、ウの二段に活用して、る、れの二音ウ段にそはれり。かくイ、ウの二段に活用する動詞を、上二段活用といふ。

動詞の上二段活用は、左の七行に限らる。

下二段活用

五、下二段活用

この活用の動詞は、四段活、下二段活に次いで、その數多し。この活用の動詞は、口語にては、全く上一段活用となれり。但し地方によりて、その然らざる所もなきにあらず。

起	き	く	くる	くれ	(力行)
掘	じ	ず	ずる	ずれ	(サ行)
落	ち	つ	つる	つれ	(タ行)
強	ひ	ふ	ふる	ふれ	(ハ行)
恨	み	む	むる	むれ	(マ行)
酬	い	ゆ	ゆる	ゆれ	(ヤ行)
懲	り	る	るゝ	るれ	(ラ行)

授く、教ふ、榮ゆ、枯る等の動詞は、いづれも、

授	け	く	く……る	く……れ
教	へ	ふ	ふ……る	ふ……れ
榮	え	ゆ	ゆ……る	ゆ……れ
枯	れ	る	る……る	る……れ

の如く、五十音圖中、エ、ウの二段に活用しる、れの二音ウ段にそはれり。かくエ、ウの二段に活用する動詞を下二段活用といふ。

動詞の下二段活用は、五十音圖中の十行にわたれり。即ち左の如し。

(得)	え	う	うる	うれ	(ア行)
-----	---	---	----	----	------

授	け	く	くる	くれ	(カ行)
馳	せ	す	する	すれ	(サ行)
棄	て	つ	つる	つれ	(タ行)
尋	ね	ぬ	ぬる	ぬれ	(ナ行)
教	へ	ふ	ふる	ふれ	(ハ行)
改	め	む	むる	むれ	(マ行)
榮	え	ゆ	ゆる	ゆれ	(ヤ行)
枯	れ	る	るる	るれ	(ラ行)
植	ゑ	う	うる	うれ	(ワ行)

この活用の動詞は、四段活の動詞につぎて、その數甚だ多し。この活用は、口語にては、全く下一段活用となれり。但し地方

によりて、その然らざる所もなきにあらず。

練習

- 一、左の文中より動詞を摘出し、且つその活用の種類をいへ。
- (一) 山を越えて里に出づれば、日既に暮る。
- 二) 角をためて牛を殺すなかれ。
- (三) テニスの原は、いつか月夜となりにけり。さらば歸らむ、あすの遊もこれと定めて。
- (四) 雲吹く風をながめすて、水の音にし聞きも入りぬ。
- 二、左の動詞を、文語、口語兩様に活用せよ。
載す、見ゆ、出づ、埋む、呑む、肥ゆ
- 三、左の口語を、文語に活用せよ。
倒れる、撫でる、貯へる、統べる、入れる

第四章 動詞の活用 その二

變格活用には四種あり。カ行變格活用、サ行變格活用、ナ行變格活用、ラ行變格活用、これなり。

六、カ行變格活用

來(く)といふ動詞は、

(來) こ き く く……る く……れ

の如く、五十音圖のイ、ウ、オの三段に活用し、且つる、れの二音ウ段にそはれり。これをカ行變格活用といふ。

この活用の動詞は、この一行、この一語あるのみ。

この語は、口語にては、るのそはざるウ段の活用を失ひたり。

カ行變格活用

サ行變格活用

七、サ行變格活用

イイウエ

爲(す)といふ動詞は、

サスセ

爲(サ) カ スセ

す…る

す…れ

の如く、五十音圖のイ、ウ、エの三段に活用し、且つる、れの二音
ウ段にそはれり。これをサ行變格活用といふ。

この活用の動詞は、爲(す)の外、おはすの一語あるのみ。然れども
名詞より動詞に轉ずる語は、常に多くこの活用による。
たとへば、

都す 旅す 枕す 東す 南す 賛成す 命令す

勉強す 敬す 嘉す

等の如し。この類、頗る多し。また、

辱(う)す 詳(じやう)にす 職(しやく)とす

の如きも、この活用と見なすことを得べし。

この場合に發音の便によりて、すが濁音ずに變ずることあり。
たとへば、

信(しん)ず 論(ろん)ず 生(せい)ず 重(じゆう)んず うとんず

等の如し。

この活用の動詞も、口語においては、カ行變格活と同じく、
のそはざるウ段の活用を失ひたり。

八、ナ行變格活用

死(し)ぬといふ動詞は、

死(シ) ナ ぬ…る ぬ…れ ぬ

ナ行變格活用

の如く、五十音圖のア、イ、ウ、エの四段に活用し、更なる、れの二音ウ段にそはれり。これをナ行變格活用といふ。この活用の動詞は、死ぬの外、往ぬ(いぬ)の一語あれども、普通文には多く用ゐられず。

この活用の動詞は、口語にては、四段活用と同じくなれり。

九、ラ行變格活用

用
ラ行變格活

有りといふ動詞は、

有
ら
り
る
れ

の如く、五十音圖のア、イ、ウ、エの四段に活用す。されど四段活とは異りて、いひ切る時に、ウ段のるを以てせずして、イ段のりを以てす。故に四段活と區別して、特にこれをラ行變格活

用といふ。この活の動詞は、有りの外、居り、侍りの二語あるのみ。但し侍りは普通文には用ゐられず。この活用の動詞は、口語にては、ナ行變格活と同じく、四段活用となれり。



▲動詞の活用
(と文語と照語の對照)



練習

- 一、左の動詞を活用せよ。
煮る 強ふ 居る 出立す 見す 見ゆ
- 二、左に挙げたる文につきて、各動詞を摘出し、且つその活用を示せ。
(一) 弟を伴ひて、夕潮のみちくる磯を散歩す。
(二) 死ぬるはやすく、生くるはかたし。
(三) 書齋とて名ばかりなれど、膝を入れむにはあまりあり。

第五章 動詞活用形の類別

動詞は語尾の活用によりて、さまざまの形を生じ、その形はまたそれぞれの用方あり。その用方によりて、これを左の六種に類別す。

- 一、未然形
- 二、連用形
- 三、終止形
- 四、連體形
- 五、已然形
- 六、命令形

各種の動詞のうち、その語尾活用の最も多きナ行變格活の動詞を取りて、左にこれを説明すべし。

一、未然形 第一活用形の死なは、死なばもろとも』の如く、未だ成り立たざる動作を豫定していふ場合に用ゐらる。故

未然形

連用形

にこの形を未然形といふ。

二、連用形 第二活用形の死には、『一族みな死に絶ゆ』徒に死に難し』の如く、直に動詞、形容詞に連ぬる場合に用ゐらる。故にこの形を連用形と名づく。

終止形

三、終止形 第三活用形の死ぬは、『功半にして死ぬ』の如く、その動作をいひ切る場合に用ゐらる。故にこの形を終止形と名づく。

連體形

四、連體形 第四活用形の死ぬるは、『死ぬるもの數を知らず』の如く、直に名詞、代名詞に連ぬる場合に用ゐらる。故にこの形を連體形と名づく。

已然形

五、已然形 第五活用形の死ぬれば、『死ぬれば萬事休す』の

命令形

如く已に成り立ちたる動作を、定めていふ場合に用ゐらる。故にこの形を已然形といふ。

六、命令形 第六活用形の死ぬは、『いさぎよく死ぬ』の如く、その動作を他に命ずる場合に用ゐらる。故にこの形を命令形と名づく。

以上の各活用形を排列するに、便宜上、左の如く段階を設く。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
死な	死に	死ぬ	死ぬる	死ぬれば	死ぬ

すべての動詞は、みなこの死ぬと均しく、六種の活用形の用方を有す。故にその各活用形は、またかくの如く六段に排列

せられ、それぞれの名目を與へらる。その名目に隨ひて排列せられたる動詞活用の段階、これを動詞の活段といふ。左にかゝげたる表について、各種の動詞の段階を知るべし。

動詞の各活用形は、その名目によりて示されたる外、なほ別にその用方あり。左にその主要なるものを擧げ示さむ。

一、未然形、已然形は、本來接續の用を有す。そは前に擧げたる例について、これを見ることを得べし。しかして、連用形、終止形、連體形もまたいづれも助詞の助をかりて、下文に接續するに用ゐらるゝことあり。これを未然、已然の接續格と稱す。たとへば左の如し。

人死にて、秋ものさびし。

欠

欠

よしや死ぬとも退かじ。

母は死ぬるに、兒は頑是なし。

二、連用形はまた、動詞當體のまゝにて、暫時中間にいひさして、下文に接續するに用ゐらる。すなはち中止の接續の用をなす。これを中止接續格と稱す。たとへば左の如し。

親も死に、子も死に、孫も死ぬ。

三、終止形は、文の終結となすに用ゐらるゝこと、前の例に擧げたるが如し。しかして連體形、已然形もまた、文の終結として用ゐらるゝことあり。これを通じて終止格と稱す。たとへば左の如し。

栗の花落つ。

栗の花ぞ落つる。
栗の花こそ落つれ。

四、命令形は、命令の意をあらはすに用ゐらるゝこと、前に、
舉げたるが如し。そのしかく用ゐるなざるゝを命令格と稱す
五、連用形はまた、直にいひすわりて、名詞に轉ずるに用ゐ
らる。たとへば左の如し。

思 行 遊 釣 恨 病 泊 祭 行

練習

左の文につきて動詞を指摘し、且つその語形の名をいへ。

- (一) 百舌鳴く村に、柿の實の赤く熟したるを見よ。
- (二) 山路を行きて、飢ゑつかれし人を助けたり。さばかり快かりしこ
とは、われ未だ經驗せず。

動詞の性

動詞はそのあらはす動作の性質の上より、二種に大別せら
る。自動性の動詞、及び他動性の動詞これなり。これを動詞の
性と稱す。

自動詞

自動詞 『鳥飛ぶ』『花落つ』の飛ぶ、落つの如く、動作の主なる
事物あるのみにて、動作の成立する動詞を、自動性の動詞と
いひ、略して自動詞と稱す。

他動詞

他動詞 『漁夫網を打つ』『風大木を倒す』の打つ、倒すの如く、

第六章 動詞の性

- (三) ほのかに開ゆる瀧の音をしるべに、道もなき山路をたどりぬ、
- (四) 日はくれつ、里は遠きを。なほつとめていそぐとすれど、道は林と
林との間に入りて、一步の前だに見えわかぬをいかにせむ。

その動作の主なる事物の外、別にその動作の及ぶべき目的の事物ありて、はじめて、その動作の成立する動詞を、他動性の動詞といひ、略して他動詞と稱す。

他動詞の目的となるべき語は、必ずをを伴ふ。故に『何を』といふ語に接すべき動詞は、概して他動詞なり。自動詞は多く『何を』といふ語に接せず。但し、『鳥、夕映の空を飛ぶ』、『犬、黄昏の道を驅く』等の如く、『何を』といふ語に接するものもなきにあらず。

多くの動詞のうちには、その語原同じくして、その性の異なるもの少からず。しかしてこれらの動詞は、概ねその活用を別にせり。たとへば左の如し。

自動

他動

花散る(四段活)

花を散す(下二段活)

兵進む(四段活)

兵を進む(下二段活)

金魚活く(上二段活)

金魚を活す(四段活)

髪延ぶ(上二段活)

髪を延す(四段活)

また、まゝ同一の活用にして、自他兩性を兼ねる動詞もなきにあらず。たとへば左の如し。

自動

他動

戸自然と開く(四段活)

強ひて戸を開く(四段活)

水漸く引く(四段活)

水を田に引く(四段活)

練習

一、左の動詞の活用と性とを問ふ。
受く 乗る いそぐ 悩む 迎ふ

二、左の自動詞を他動詞に變ずるには、いかなる活用を以てすべきか。
一々その活用をいへ。

アイシ
溶く_レ 從ふ_レ 過す 見ゆ 合ふ 集る 落つ 肥ゆ 動く 起く
テウシ

第七章 動詞の綴字

動詞の假字
づかひ

一、動詞の假字づかひ 動詞の語尾につきて、假字の相ま
ぎるゝは、左の二種なり。

- (一) いとひとゐと……………(酬い、問ひ、用ゐの類)
- ふとゆとうと……………(教ふ、悔ゆ、据うの類)
- えとへとゑと……………(燃え、堪へ、植ゑの類)

(二) じとちと……………(論じ、閉ぢの類)

ずとづと……………(論ず、閉づの類)

動詞はすべて五十音圖の同行にのみ活用するものなれば、
その動詞の何行に活用するかを吟味すれば、その假字づか
ひの差別は、おのづからに了解せらるべし。なほ左にその注
意を述べべし。

(一) ア行、ヤ行、ワ行に活用する動詞は左の如し。

ア行に活用するもの

う(得) (下二段活)

ヤ行に活用するもの

射る 鑄る (上一段活)

老ゆ	悔ゆ	報ゆ	(上二段活)
甘ゆ	癒ゆ	おびゆ	覺ゆ
越ゆ	肥ゆ	凍ゆ	榮ゆ
潰ゆ	煮ゆ	生ゆ	冷ゆ
見ゆ	見ゆ	燃ゆ	萌ゆ
			(下二段活)
			殖ゆ
			吼ゆ
			絶ゆ
			聳ゆ
			消ゆ
			聞ゆ

ワ行に活用するもの

ある 率ある 用ある

(上一段活)

植う 飢う 据う

(下二段活)

以上の諸語の外は、大抵ハ行に活用するものと知るべし。

(二) サ行に生きて、じ、ずを用ゐるべき動詞は、名詞よりサ

行變格活に變じ來れる語のみなり。その外には、たゞ『混ず』
『掘ず』の二語あるのみ。さればその外は、すべてタ行の濁音
に活用するものと知るべし。

また、ハ行に活用する動詞にして、五十音圖の第一段の音よ
りふに連る時は、その音轉呼せられて、まぎれやすきことあ
り。たとへば左の如し。

母をしたふ(慕) 鳶空にまふ(舞)

猫鼠をとらふ(捕) 師の教にかなふ(副)

かやうの場合には、その動詞の語尾を轉じ試みて、

したふ……したひ まふ……まひ

の如くすれば、その假字づかひを誤ることなし。

動詞の音便

二、動詞の音便 カ行、或はサ行に活用する動詞にして、その語尾のき、又はしよりて、又はたりに連る時は、音便によりてい、と發音し、またハ行に活用する動詞の語尾ひよりて、又はたりに連る時は、同じく音便によりてう、と發音す。たとへば左の如し。

紙を割きてすつ。……紙を割いてすつ。

母を思ひてやまず。……母を思うてやまず。

この場合には、その轉じたる音の假字を書くべし。

練習

左の文につきて、綴字の誤を正せ。

- (一) 多くいうは少しく行にしかず。
- (二) 兵を率ひて敵の遁ぐるを追う。

いひかゝる
こゝろふか
れ

- (三) 教うるは學ぶの半ばなり。
- (四) 絶へて音信なしかぞうれば既に三月を過ぐ。
- (五) 井のはたの柳風に靡ひて、枝長く垂れたり。
- (六) 父に伴ふて市に行く。

第八章 形容詞の活用

形容詞の語形も變化す。その變化を形容詞の活用といふ。活用する部分を語尾といひ、活用せざる部分を語幹といふこと、動詞に同じ。

一、く活 く活の形容詞は、くしきけれと活用す。たとへば左の如し。

く活

しく活

高く 低く しき けれ

二、しく活 しく活の形容詞は、くき けれと活用す。この類の形容詞は、語幹にしじを含みて、しとは活用せず。たとへば左の如し。

樂し 悲し しく ○ きけ けれ

しく活の形容詞の語尾を缺ける所は、語幹をそのままに用ゐる。口語にては、く活、しく活のしきの活用、共に變じていいとなれり。

轉活

三、轉活 すべて形容詞は、その第一段のくしくの語尾より、更に動詞のありにに連りて、

高し 樂し からかり かりかる かるかれ

あり活

の如く活用すること常なり。これを轉活といふ。

四、あり活 別類形容詞は、もと公平に、活潑に、欣然と、歴々と、新に、縁に等のに、とより、動詞のありにに連りて成れるものなるが故に、その活用おのづからありにに隨ふ。故にかりに、これをあり活といふ。即ち左の如し。

欣然 たら たり たる たれ
紫 なら なり なる なれ

但し、その用法によりて、『山は縁に、水は白し』の如く、その本にかへして用ゐることなきにあらず。

▲形容詞の活用
しく活 活
轉活 活
あり活

練習

左に擧げたる文につきて、形容詞を抽出して、その活用を示せ。

- (一) 山は高く、川は深し。
- (二) 夕月のかげほのかなり。
- (三) 裏山に蟬かしまし。
- (四) 松風の音颯々たり。
- (五) 貧しきになやまず、貴きにはこらす。

第九章 形容詞活用形の類別

形容詞の活用形も、動詞と同じく、またそれぞれの用方あり、故にまた動詞の如く、未然形、連用形、終止形、連體形、已然形、命令形の六種の段に類別す。左に各種の形容詞を表示すべし。

く活及びしく活の各段

一、く活及びしく活

く活	よく	よく	よし	よき	よけれ
しく活	あしく	あしく	あし	あしき	あしけれ
	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
					命令形

く活、しく活には、命令形をかけり。

轉活及びあり活の各段

二、轉活及びあり活

轉活	赤から	赤かり	赤かり	赤かる	赤かれ	赤かれ
あり活	靜なら	靜なり	靜なり	靜なる	靜なれ	靜なれ
	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形

轉活形容詞はその連用形において、形容詞の原形に還り、別類形容詞は、連用において、有りを去りたる原形に還ることあり。

形容詞も動詞と同じく、その未然形、連用形、終止形、連體形、已然形は、ともに下文への接續をなすに用ゐらる。

形容詞の連用形は、名詞に轉せずして、副詞に轉ず。たとへば左の如し。

赤くなる。うれしく思ふ。

形容詞より名詞を轉成するには、その活用の語尾を去り、もしくはそれにさみ等をそへて成す。たとへば左の如し。

赤 黒 太さ 深み

練習

左の文につきて、形容詞を指摘し、且つその活用形の名をいへ。

あり	活	欣然	欣然たら	欣然 <small>とけり</small>	欣然たり	欣然たる	欣然たれ	欣然たれ
		奇麗	奇麗なら	奇麗 <small>なり</small>	奇麗なり	奇麗なる	奇麗なれ	奇麗なれ

形容詞活用形の表 その二

口語

	活語	活段	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
く	活	善	よく	よ <small>しく</small>	よい	よい	よ <small>い</small> けれ	
しく	活	樂	たのしく	たのし <small>しく</small>	たのしい	たのしい	たの <small>し</small> けれ	
あり	活	綺麗	綺麗なら	綺麗 <small>に</small>	綺麗 <small>だ</small> な	綺麗 <small>だ</small> な	綺麗なれ	綺麗なれ

にさみ等をそへて成すたとへば左の如し。

赤 黒 太さ 深み

練習

左の文につきて形容詞を指摘し、且つその活用形の名をいへ。

形容詞活用形の表 その一

		活語		活段	
あり	活	く	活	く	活
奇麗	欣然	悪	善	悪	善
奇麗なら	欣然たら	あしから	よから	あしく	よく
奇麗 <small>に</small> なり	欣然 <small>と</small> なり	あしかり	よかり	あしく	よく
奇麗なり	欣然たり	あしかり	よかり	あし	よし
奇麗なる	欣然たる	あしかる	よかる	あしき	よき
奇麗なれ	欣然たれ	あしかれ	よかれ	あしけれ	よけれ
奇麗なれ	欣然たれ	あしかれ	よかれ		

文語

形容詞活用形の表 その二

		活語		活段	
あり	活	く	活	く	活
奇麗	樂	善			
奇麗なら	たのしく	よく			
奇麗 <small>に</small> なり	たのし <small>く</small> く	よ <small>う</small> く			
奇麗 <small>だ</small> なり	たのしい	よい			
奇麗 <small>だ</small> なる	たのしい	よい			
奇麗なれ	したの <small>け</small> けれ	よ <small>い</small> けれ			
奇麗なれ					

口語

- (一) こひしくば歸れ故里へ。
- (二) おもしろく遊ぶ。
- (三) 月明に、星稀に、鳥鵲南に飛ぶ。
- (四) 波の高きに千鳥も鳴く。
- (五) 寒き空に、月ものすごくすめり。

第十章 形容詞の綴字

形容詞の語尾の假字につきて、そのまぎれやすきは、その音便の場合のみなり。たとへば左の如し。

形容詞の音便

あゝ悲しきかな。……………あゝ悲しいかな。

親しくして狎れず。……………親しうして狎れず。

かく音便にてい、うと發音するものは、必ずい、うと書かざる

べからず。

口語にては、形容詞の語尾のきとしとは、共にいとなる。くも
うとなることあり。たとへば左の如し。

文語

口語

高き山。	富士山は高	高い山。	富士山は高い。
し。	高くあがる。	高う(く)あがる。	
おもしろき遊。	遊お	おもしろい遊。	遊がおも
もしろし。		しろい。	
おもしろく候。		おもしろうございます。	

練習

左の文について、その綴字の誤を正せ。

- (一) 美しい花がおびたゞしふ咲きました。
- (二) 水清ふして、底の石も数へつべし。

第十一章 助動詞の種類 その一

助動詞は、相の助動詞、時の助動詞、法の助動詞の三類に大別せらる。しかして三類また各、小分あり、それぞれ動詞に連絡し、もしくは助動詞相互に連結して、以てその用を達す。

相の助動詞

一、相の助動詞 助動詞の動詞につきて、その動作を他に

なさしむる趣、他よりしむけらるゝ趣等をあらはすに用ゐらるゝものを、相の助動詞といふ。

相の助動詞は、所相の助動詞、能相の助動詞、役相の助動詞、敬

所相の助動詞

相の助動詞の四種に分つ。

(一) 所相の助動詞

苗代の苗、風に吹かる。

義なければ、人に疎ぜらる。

右の例の吹かる、疎ぜらるるのる、らるの如く、動詞につきて、他より動作をしむけらるゝ趣をあらはす助動詞を、所相の助動詞といふ。る、らるの二語、これに屬す。

能相の助動詞

(二) 能相の助動詞

この書物は、われにも讀まる。

高き峠も、下駄にて越えらる。

右の例の讀まる、越えらるるのる、らるの如く、動詞につきて、

役相の助動詞

その動作を爲し得べき能力ある趣をあらはす助動詞を、能相の助動詞といふ。る、らるの二語、これに屬す。

(三) 役相の助動詞

友をおもてに待たす。

栗を笊に入れさす。

弟をして犬を打たしむ。

右の例の待たす、入れさす、打たしむのす、さす、しむの如く、動詞につきて、他を使役して、その動作をなさしむる趣をあらはす助動詞を、役相の助動詞といふ。す、さす、しむの三語、これに屬す。

(四) 敬相の助動詞

敬相の助動詞

郷里に歸らる。

海外に赴任せらる。

おかはりもあらせずや。

菊を御覽ぜさす。

天皇、行幸せしめ給ふ。

右の例の歸らる、赴任せらる、あらせ、御覽ぜさす、行幸せしめぬの、らる、す、さす、しむの如く、動詞につきて、その動作に崇敬の趣を含めあらはす助動詞を、敬相の助動詞といふ。らる、す、さす、しむこれに屬す。但し、これらの助動詞の外、動詞より轉來せるます、給ふ、侍り、候ふ、申す、上ぐ、まつる、奉る、ます(口語)等の助動詞を以てすること多し。

所相のる、らると、能相のる、らると、敬相のる、らると、及び役相のす、さす、しむと敬相のす、さす、しむとは、いづれも共に同じ助動詞なり。

第十二章 助動詞の種類 その二

時の助動詞

二、時の助動詞 助動詞の動詞につきて、その動作がその文の上において、現在、もしくは過去、未來いづれかの時間を示すに用ゐらるゝものを、時の助動詞と稱す。

時の助動詞は、完了の助動詞、過去の助動詞、未來の助動詞の三種に分つ。

一 完了の助動詞

日は暮れぬ。

完了の助動詞

過去の助動詞

ふと樵夫の唄聞えつ。
月は出でたり。

右の例の暮れぬ、聞えつ、出でたりのぬ、つ、たりの如く、動詞につきて、その動作の今まさに了りたる趣をあらはす助動詞を、完了の助動詞といふ。ぬ、つ、たりの三語これに屬す。

(二) 過去の助動詞

昨日は、君の來むと思ひき。
昔、支那に許由といふ人ありけり。

右の例の思ひき、ありけりのき、けりの如く、動詞につきて、その動作の既に過ぎ去りし趣をあらはす助動詞を、過去の助動詞といふ。き、けりの二語これに屬す。

未來の助動詞

(三) 未來の助動詞

雲ぎれ見えたり。雨、今か霽れむ。

右の例の霽れむのむの如く、動詞につきて、その動作の未だ成らざる趣をあらはす助動詞を、未來の助動詞といふ。むの一語これに屬す。

このむは、推定の助動詞むより轉じたるものなり。

法の助動詞

三、法の助動詞 助動詞の動詞につきて、その文の意義に

隨ひ、或は推定し、或は否定し、或は指定する等、さまざまの勢を現するに用ゐらるゝもの、これを法の助動詞といふ。

法の助動詞は、推定の助動詞、推量の助動詞、指定の助動詞、否定の助動詞、比況の助動詞の五種に分つ。

推定の助動詞

(一) 推定の助動詞

かれも招かむ、これもよばむ。今宵は月のよからむに。われは斷じて、これを爲すべし。

右の例の招かむ、よばむ、よからむ、爲すべしのむ、べしの如く、動詞につきて、未だあらはれぬ動作を、かねてその事あらむと推し定むる勢をあらはす助動詞を、推定の助動詞といふ。む、べしの二語これに屬す。

(二) 推量の助動詞

この雨のいぶせきに、故里人は田植やすらむ。雨滴の音やみたり。雲はれて月出づらし。風や引きけむ、頭重し。

推量の助動詞

指定の助動詞

(三) 指定の助動詞

右の例のすらむ、出づらし、引きけむのらむ、らし、けむの如く、動詞につきて、たしかならぬ動詞を、心あてに推し量る勢をあらはす助動詞を、推量の助動詞といふ。らむ、らし、けむの三語これに屬す。

山の端の明きは、はや月の出づるなり。家に孝子たるものは、必ず國に忠臣たり。

右の例の出づるなり、孝子たる、忠臣たりのなり、たりの如く、動詞につきて、その動作をそれと指し定むる勢をあらはす助動詞を、指定の助動詞といふ。なり、たりの二語これに屬す。

否定の助動詞

たりは名詞にのみ連りて、動詞には連結せず。

(四) 否定の助動詞

花、未だ開かず。

三たびは、ものを考へざれ。

雨も降らじ、風も吹かじ、君が航海の終らむまでは、

空くもりぬ。友は來まじ。市なる父も歸るまじきか。

右の例の開かず、考へざれ、降らじ、吹かじ、來まじ、歸るまじきのず、ざり、じ、まじの如く、動詞につきて、その動詞を否定する勢をあらはす助動詞を、否定の助動詞といふ。ず、ざり、じ、まじの四語これに屬す。

比況の助動詞

(五) 比況の助動詞

風、山、の、聳、ゆる、ごとく、達、辯、水、の、流、る、よ、ごとし。

右の例の聳ゆるごとく、流るよごとしのごとしの如く、動詞につきて、その動作を指定して、ものに比ぶる勢をあらはす助動詞を、比況の助動詞といふ。ごとしの一語これに屬す。

以上諸法の助動詞の外、

水村、靄にくれて、いづこやらむ、鐘の音すなり。

の音すなりのなりの如く、動詞につきて、その動作を指定して、詠歎の勢をあらはす、詠歎の助動詞なりあれど、普通文には殆ど用ゐられず。

けら けり ける けれ(過去)
ざら ざり ざる ざれ(否定)

(三) ナ行變格活の如き活用をなすもの

な にぬ ぬる ぬれ ね(完了)

形容詞活

二、形容詞の如き活用をなすもの

べく べし べき べけれ (推定)
まじく まじ まじき まじけれ(否定)
ごとく ごとし ごとき (比況)

特殊活

三、特殊の活用をなすもの

じ (否定)
らし (推量)

ずぬね (否定)

むめ (未來、推定)

らむらめ (推量)

きししか(過去)

動詞より轉じ來れる、敬稱の助動詞は、すべて動詞本體の活用にひとし。

口語の助動詞は繁雜にわたるを以て、こゝに省けり。次の表によりて類推すべし。

▲助動詞の活用	動詞活	下二段活の如きもの
	形容詞活	ナ行變格活の如きもの
	特殊活	ナ行變格活の如きもの

第十四章 助動詞活用形の類別

動詞の如き活用をなす助動詞は、いづれも動詞と同一なる活段、名目を有し、形容詞の如き活用をなす助動詞は、いづれも形容詞と同一なる活段、名目を有す。その特殊活なるものも、またそれに準ずる活段、名目を有す。たとへば左の例の如し。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
れ	れ	る	るゝ	るれ	れ(よ)
べく	べく	べし	べき	べけれ	
ず	ず	ず	ぬ	ね	

なほ、左にかゝげたる表につきて、これをさとるべし。

練習

左の文につきて、助動詞を摘出し、その語形をいへ。

- (一) 落葉はらふのこぼれぬるに、庭には夕日の影のどかにさしたり。
- (二) 巖壁削るがごとし、よもこの山坂、鹿も越すまじ。
- (三) 家に孝子たらば、必ず國に忠臣たるべし。
- (四) 長押ながしの槍は曾祖父君の遺物なり。あはれこの槍もて、いかに戰場に馳驅し給ひけむ。

中等國文法教科書

上卷終

特殊活						形容詞活					
す					ませ	ごとく	まじく	べく	たら	なら	
ず					まく	ごとく	まじく	べく	たり	なり	めり
じ	す	らし	けむ	らむ	む	まし	まじ	べし	なり	たり	なり
(じ)	ぬ	(らし)	けむ	らむ	む	まし	まじき	べき	なる	たる	なる
(じ)	ね	(らし)	けめ	らめ	め	ましか	まじけれ	べけれ	なれ	たれ	なれ
									たれ	なれ	
否定	推量			推定	推定	過去	比況	否定	推定	詠歎	指定

助動詞活用形の表 その一

文語

特殊活						形容詞活			動詞活														未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	助動詞の種類																																																																						
す	ず	ら	け	ら	ま	ごとく	まじく	べく	たら	なら	け	たら	な	て	しめ	させ	せ	られ	れ	す	ず	らし	けむ	らむ	む	まし	き	ごとし		まじ	べし	なり	たり	なり	めり	けり	たり	ぬ	つ	しむ	さす	す	られ	る	ね	(らし)	けむ	らむ	む	まし	し	ごとき	まじき	べき	なる	たる	なる	める	ける	たる	ぬる	つる	しむる	さする	する	らるる	るる	ね	(らし)	けめ	らめ	め	ましか	しか	まじけれ	べけれ	なれ	たれ	なれ	めれ	けれ	たれ	ぬれ	つれ	しむれ	さすれ	すれ	らるれ	るれ	たれ	なれ	たれ	たれ	ね	て：よ	しめ：よ	させ：よ	せ：よ	られ：よ
否定	推量				推定	過去	比況	否定	推定	詠歎	指定	推量	過去	完了	敬役相			敬能相			所相																																																																														
す	ず	ら	け	ら	ま	ごとく	まじく	べく	たら	なら	け	たら	な	て	しめ	させ	せ	られ	れ	す	ず	らし	けむ	らむ	む	まし	き	ごとし	まじ	べし	なり	たり	なり	めり	けり	たり	ぬ	つ	しむ	さす	す	られ	る	ね	(らし)	けむ	らむ	む	まし	し	ごとき	まじき	べき	なる	たる	なる	める	ける	たる	ぬる	つる	しむる	さする	する	らるる	るる	ね	(らし)	けめ	らめ	め	ましか	しか	まじけれ	べけれ	なれ	たれ	なれ	めれ	けれ	たれ	ぬれ	つれ	しむれ	さすれ	すれ	らるれ	るれ	たれ	なれ	たれ	たれ	ね	て：よ	しめ：よ	させ：よ	せ：よ	られ：よ	れ：よ
否定	推量				推定	過去	比況	否定	推定	詠歎	指定	推量	過去	完了	敬役相			敬能相			所相																																																																														

欠

10
2
221

大正六年十月廿七日
大正七年二月七日
訂正再版發行
訂正再版發行

定價
上卷 參拾錢
下卷 參拾八錢

不許
中等國文法教科書
複製

著者 山田孝雄
著者 內海弘藏
發行者 大葉久吉
印刷者 渡邊八太郎
東京市日本橋區本石町三丁目拾七番地
東京市牛込區榎町七番地

發行所 東京市日本橋區本石町三丁目
關西專賣 大阪市東區淡路町四丁目
東京寶文館
大阪寶文館
合資會社

印刷所 日本印刷株式會社

欠

終

